



## 欧州の移民問題

一旦姿を消した外国人が徐々に町へ戻ってきている。今回の大震災は日本人と外国人の関係を考えるのに重要な経験だったかもしれない。

「移民問題」にはいろいろな意味があるが、一つに高齢化対策としての側面がある。EUにおける経験を振り返れば、現役労働力を補うため移民労働力を積極的に受入れた経緯がある。ひところは成功したように見え、多様な文化を寛大に受け入れる欧州社会として評価されていた時期もあった。

しかしながら、リーマン危機に端を発する世界的な景気の落ち込みで、各国とも失業率が上昇。自国民の職を奪う移民労働者に対する風当たりが強くなり、移民排斥を訴える極右政党が支持を伸ばしてきている。

欧州の場合、EU新規加盟国の東欧諸国からの移民急増も大きなファクターとなっている。東欧諸国は小国の集まりというイメージがあるが、後ろに控えるロシア、ウクライナ、ベラルーシ等も含め東欧・ロシア方面からの大人口移動の強い社会的圧力がある。これは極東に位置する日本で、仮に東南アジアや中国が抱える大人口が大量流入することになった場合に感じられる人口圧力に匹敵すると言っている。

さらに、とくに今年に入って問題が鮮明になってきたのが欧州人とイスラム教徒との関係である。中東・北アフリカ紛争の影響でリビア、チュニジアからの難民が南欧に押し寄せ、大きな社会問題となっている。

フランスにおけるブルカ禁止(今年4月7日から実施)、オランダにおけるコーシャ禁止(現在議会で法案審議中)など、異文化に対する寛容(トレランス)がなくなっている。英国でも移民に対する英語力テストの厳格化や、移民・留学生ビザの要件強化など、流れは異質なものに非常に厳しい方向に動いている。

本稿の内容については可能な限り正確を期していますが、万が一誤謬があった場合、Komatsu Research & Advisory(以下KRA)は一切の責任を負いません。本稿の内容は、各執筆者の見解に基づき作成されたものであり、KRAの統一的な見解を示すものではありません。情報や見解は、予告なしに変更することがあります。本稿からリンクを張っている外部のサイトのコンテンツに関しては、KRAはいかなる責任も負いません。本稿の内容を利用したことによって生じるいかなる不都合や損害についてもKRAは一切の責任を負いませんのでご了承下さい。

このような諸問題に次々に直面する欧州ではあるが、ポジティブ・ネガティブ両面で挑戦を続けざるを得ない状況に置かれている。

これまでの欧州移民政策を「成功」と手放しで評価するのは単純に過ぎる。日本でも高齢化対策の一環として外国からの移民労働者を積極的に受入れるべきだとの議論を聞くにつけ、欧州モデルは必ずしも成功していないことを現状認識として踏まえる必要がある。

とはいえ、単純に「移民を受入れるべきでない」ということにもならない。むしろ、日本独自の価値観・考え方で新たな突破口を切り拓く覇気が求められる。それが成功すれば、欧米諸国も日本から学ぶ。このように日本の発明家気質的な能力も積極的にアピールしていくことが将来の生き残りを目指すために不可欠ではなかろうか。

小松 啓一郎

#### ▼参考レポート

- 英国のスキル不足と外国人労働者 | 2011年6月20日  
[www.komatsuresearch.com/report0020-UK-skill-and-immigration-workers.pdf](http://www.komatsuresearch.com/report0020-UK-skill-and-immigration-workers.pdf)
- 英国の移民数制限措置 | 2010年12月10日  
<http://www.komatsuresearch.com/report0017-UK-immigration-regulation.pdf>